

ピタパタ第二回公演上演台本

猫

町

○登場人物

詩人 妻 女中 ママ 客1 客2 若い男 駅長 時計屋

○表記について

〈 〉 〱 登場時の履き物

○音楽／SEについて

M 0 〱 機織る乙女

M 1 〱 nash1

M 2 〱 君恋し (long)

M 3 〱 nash2

M 4 〱 I'm Gonna Love That Guy

M 5 〱 Memories Of You

M 6 〱 hurt

M 7 〱 君恋し (short)

S E 1 〱 じぼ・あん・じゃん

S E 2 〱 汽笛

S E 3 〱 汽車

S E 4 〱 蝉

プロローグ

その小屋は商店街の一面にある。通りに面したガラス戸の奥は、あたかも駅の待合室の風情。そこでは出番を待つ俳優たちが思いおもいに食事をしたり、化粧したり――。商店街の買い物客たちが、その模様を好奇の目で眺めつつ、通り過ぎていく。掲示板が置かれ、数十分後にここで開始される芝居の案内が書かれてある。

※

この小屋の裏口が、物語の入口である。

黒幕に覆われた狭い通路の突き当たりに「受付」があり、駅長が切符にかいさつきよう

改札鉄を入れている。

駅長から半券を受け取り、客席に足を踏み入れると、四方を白壁に囲われた狭い空間。

舞台中央に柱が縦に並んで三本。

客席に一番近い柱の上部に、傘のついた電灯。

残り二本の根本には枯葉が降り積もっている。

舞台奥は平台で一段高い。

平台の手前、古びた木製の床に、バーのカウンター。上にウイスキーの瓶と、飲みかけのグラスが置かれてある。周囲に箱状の置き道具が、いくつか配置されてある。それらは劇中で、ときに宿の椅子、家の文机となり、ときに火鉢、ときに蓄音機となり――。静かに流れるマンドリンの音楽。

※

【M0】

女中、現れる。いわゆる前説。

○前説

女中 本日は、ピタパタ第2回公演「猫町」にご来場いただき、まことにありがとうございます。開演に先立ちまして、いくつかお願いがございます。

ケータイ電話は音の出ない設定にするか、電源をお切りください。許可のない録音、写真・ビデオ撮影は固くお断りします。

上演時間は約1時間20分です。途中、休憩はございません。お手洗いは、そちらを出て左、入口横に一つ、ございます。男女兼用で一つだけですので、ご用の方はお早めにお済ませください。
では、開演まで、もうしばらくお待ちください。

女中、去る。

客入れ最後の曲。

【M1】

音楽、高まり、客電が落ちる。

最後に柱の、傘のついた電灯も消える。

★暗転。

1・駅（一九二九年）

【M1】 続いている。

昭和四年、晩秋。

その土地がどこであるのか、具体的に特定しない。
よって以下、劇中の会話は基本的に標準語でなされる。
暗闇の中、詩人（革靴1）の声とする。

詩人

（声） 旅への誘いが、次第に私の空想から消えていった。

ゆつくりと明かりがつく。

と、駅長（革靴）、ママ（パンプス）、客1（スリッパ）、客2（スリッパ）、若い男（革靴）、女中（草履）、時計屋（革靴）の姿。

駅長…カンテラを掲げ汽車の来るのを待っている。

ママ…タロットカードを捲り、ときおり溜息をつく。

客1…週刊誌を読んでいる。

客2…足の水虫の治りが気になる。

若い男…スケッチブックを開き、デッサン。

女中…そろばんをはじいている。
時計屋…時計を磨いている。

それぞれがそれぞれの時間をもてあまし、退屈な田舎町の風情。

詩人

(歩きながら) 昔はただ、その表象、汽車や汽船や、見知らぬ他国の町々やを、イメージするだけでも心が躍った。しかるに過去の経験は、旅が単なる「同一空間における同一事物の移動」にすぎないことを教えてくれた。どこへ行ってみても、同じような人間ばかり住んでおり、同じような村や町やで、同じような単調な生活を繰り返している……。

詩人、立ち止まる。一枚の枯葉を拾う。

【M1】一旦高まり、F.O。

詩人

たとえば諸君は、夜おそく家に帰る汽車に乗っている。はじめ駅を出発した時、汽車はレールの上をまっすぐに、東から西へ向かって走っている。だが、しばらくするうちに、汽車の進行する方角が、いつのまにか反対になり、西から東へと逆に走っていることに気がつく。諸君の理性は決してそんなはずがないと思う。しかし知覚上の事実として、汽車はたしかに、目的地から遠ざかって行く。やがて駅に到着し、いつものプラットホームに降りた時、

はじめに諸君は夢から醒める。磁石の針がぐるりとまわって、東西南北の空間位置が、すっかり逆になる。そして一旦それがわかれば、はじめに見た異常の景色や事物やは、なんでもない平常通りの、見慣れたつまらない物になってしまう……。

詩人、枯葉を捨てる。

そして駅のホームを立ち去ろうとしたとき、駅長が笛を吹く。
かん高い笛の音。

詩人 (ぎくりとして立ち止まり) ……。

駅長の声 待てえっ！ くら、待てえ！

駅長と詩人を除く人々、静かに去る。
とある駅のホーム。

駅長 (詩人を認め) ……あ。先生……。

詩人 こんばんは……。

駅長 今、こつちに、猫、来ませんでした？

詩人 猫？

駅長 毛の青い、ビロードみたいな……。

詩人 ビロード？
 駅長 ええ。
 詩人 ……さあ。わたしは、何も見ませんでした…。
 駅長 くそつ、逃げ足の速い泥棒猫め！
 詩人 ……。猫が、どうかしたんですか？
 駅長 どうもこうも、晩飯のおかずを、くわえて逃げていったんですよお。アジの干物を。
 詩人 ああ……。
 駅長 先生は、こんな時間にどちらへ？
 詩人 あ、いや、今、帰ってきたところです。隣町から……。
 駅長 隣町？
 詩人 ええ。
 駅長 隣町で、何を？
 詩人 まあ、何、というか……。
 駅長 ああ！ 取材ですか？
 詩人 え？
 駅長 たいへんですなあ、詩人というお仕事も。こんな田舎に湯治に来てまで……。
 詩人 ああ、まあ……。
 駅長 （猫の行方が気になる）
 詩人 あ、そうだ、駅長さん。

駅長
はい？

詩人
つかぬ事をうかがいますが……駅長さんは「憑き村」^{つむら}について、何かご存じありませんか？
ツキムラ？

詩人
ええ。そういう奇妙な村が、この辺りに存在するらしいんです。「犬神」に憑かれたものは肉ばかり食って、「猫神」に憑かれたものは魚ばかり食って暮らしている……。

駅長
ああ、憑き村……。
なんでもその村の住人は、年に一度、月のない闇夜を選んで祭礼をするんだとか……。ほら、

詩人
今夜は新月じゃないですか。（夜空を見上げる）
（つられて空を見上げる）……。

駅長
ひよつとすると今晚あたり……。
いやいや、まさか。（笑う）

詩人
？
たしかに、かつてはこの温泉場の付近にも、その種の部落がいくつかあったって話ですけど

詩人
……昔の話ですよ。さすがに、もう、今の時代には……。
ああ……：そうですか……。そうですね。（笑う）

駅長
しかし、いったいどこで、そんな話を？
隣町で、バーのママに。

詩人
バー？
ええ。

駅長 バーって、ひよっとして、駅裏の？
詩人 駅長さん、ご存じですか？
駅長 ご存じも何も……いい女でしょう？
詩人 え？
駅長 あそのママ。
詩人 ああ、ええ、まあ……。
駅長 そっかあ、ママが、そんな話を……。
詩人 あ、今、何時ですか？
駅長 え？ ああ。(腕時計に目をやり) そろそろ八時になります。
詩人 もうそんな時間ですか。
駅長 先生、晩飯は？
詩人 え？
駅長 もし、あれなら、一緒にどうです？ たいしたおかずもありませんが。
詩人 あ、いやいや。
駅長 いいじゃないですか。独りで食う晩飯は、どうも、味気なくて……。
詩人 でも……。
駅長 ちよっと、相談に乗ってもらいたいこともあるし。
詩人 相談？
駅長 ええ。

詩人 何ですか？ 相談で。

駅長 いや、そのね、ちよつと、くだんのママのことです……。 (もじもじしている)

詩人 え？

駅長 あ、いた！

詩人 ？

駅長 あそこ、泥棒猫！ くら、待てえ！

駅長、見えない猫を追って去る。

【M1】 FI。

詩人

……その頃私は、Kという温泉に逗留していた。九月も末に近く、彼岸を過ぎた山の中では、もうすっかり秋の季節になっていた――。

【M1】 高まる。

詩人、去る。

2・宿の広間（一九二九年）

詩人の姿、見えなくなる。

客1（スリッパ）、浴衣に羽織姿で現れる。

客1 うう……。 （手をこすりながら）

【M1】FO。

そこは湯治場の宿である。

客1、腰をかばうようにゆっくり椅子に座る。

客1 あタタタ……。

やがて女中（草履）、火鉢を抱え、現れる。

女中 冷えますねえ、今夜は。

客1 ああ。冷えるね。

女中 腰の具合は、どうです？

客1 んん……。

女中 少しは良くなりました？
客1 どうなんだろう。良くなったような、ならないような……。

と、浴衣に羽織姿の客2（スリッパ）、現れる。
首をかしげ、片足でトントン跳ねながら――。

女中 ……。どうされました？

客2 ものすごい音がすんのよ。

女中 え？

客2 ガサ、ガサって。

女中 ガサ、ガサ？

客2 耳に、風呂のお湯が入っちゃって。（と、こめかみを叩く）

女中 ああ……。

客2 ほら。（二、三度、首を振り）ガサ、ガサ……。ね？

女中 ね、って言われても……。

客1 そろそろ雪かね？

女中 え？ ああ、それはまだ。初雪は早くて来月の終わり、いつもは師走に入ってからですよ。

客1 そう。

女中 ええ。

客2 だけど、殺傷能力、強烈だね。ここのお湯。

女中 はい？

客2 一日浸かっただけで、水虫、すっかり治っちゃったよ。

女中 ああ……そうですか。そりゃ、よかったですね。

客2 ほら。(と、スリッパを脱ぐ)

女中 いやいや、見せなくていいですから。(顔を背ける)

客2 そ？

客1 で、先生は？

女中 ああ、今日は、まだ。

客1 まだどつかで呑んでんのかなあ。

女中 じゃないですか。

客2 先生？

女中 吞まずにいられない心境なんですよ。うん。

客1 まあ、気持ちは、わからないじゃないけど、しかしこの寒空に……。

客2 え、え、先生って？

客1 何ですか、ごちやごちや……。

女中 詩人の先生です。

客2 詩人？

女中 有名な先生なんですよ。週刊誌に載っちゃやうような。一週間ほど前からお泊まりなんです。

(と、得意げに)

客2 そんな有名な人が？

女中 ええ。

客2 この宿に？！

女中 ……いけませんか！？

客2 いけなかないけど…でも、また、なんだって、そんな偉い先生が…。

女中 だから、静かな場所で一人になりたい心境だったんですよ。うん。

客2 え、え、どういうこと？ 一人になりたい心境って？

女中 離婚したんですよ。

客2 離婚？

女中 ええ。

客2 また、なんで？

女中 そこまでは言えませんが！

客2 は？

女中 女中の口から、お客様の個人的なことを、ぺらぺらと…。

客2 はあ…。

女中 でも、どうしてもっていうなら。

客2 え？

女中 ここだけの話ですよ？

客2 あ、ああ、うん……。
女中 逃げられたんですよ、奥さんに。
客2 逃げられた？
女中 ええ。
客2 なんで？
女中 奥さんに、若い男ができて……。
客1 ちよつと、あんまり個人的なことをペラペラと……。

詩人（スリッパ）現れる。

客1 あ！（立ち上がり）あたたたた……。 （と、腰を押さえる）
女中 （振り返り）あ、先生、おかえりなさいませ。
詩人 くださいま。
女中 晩ご飯は……？
詩人 ああ。駅長さんところで、軽く済ませてきた。
女中 駅長さんと？
詩人 うん。どうしてもって、しつこいもんだから。
女中 そうですか。じゃ、お夜食に、お茶漬けでも……。
詩人 そうしてくれるかい？

女中
はい。かしこまりました。

女中、去る。

客2
あなたがそうですか？

詩人
え？

客2
詩人さんでいらっしゃるんですか？

詩人
ああ……。

客2
いやー、たいしたもんですなあ。わたし、はじめて見ましたよ。動いてる詩人で。動くんですなあ。

詩人
……。

客1
（詩人に）また、吞んでらしたんですか？

詩人
ええ。

客1
今日は、どちらで？

詩人
隣のバーで。

客1
隣の町。

詩人
ええ。

客1
そうですか。

客2
そりゃ、吞まずにいられませんよねえ。そんなことがあったんじゃあ。

詩人 そんなこと？
客1 んんっ、んんっ！（咳払い）
客2 風邪ですか？ ダメですよ。風呂上がりは、あつたかくしないと。
客1 ……。
女中の声 ーいらあ！
一同 （振り返り）？

女中、箒を手に駆け戻る。

女中 あれっ……？
客2 どしたの？
女中 今、こっちに、猫来ませんでした？
客1 猫？
女中 青い、ビロードみたいな毛の……。
詩人 えっ？
客2 こっちには来てないよ。（客1に）来てませんよねえ？
客1 ん……。
女中 おかしいわねえ。たく、どこへ逃げたんだか……。

女中、猫を探して去る。

客1 珍しいなあ、青い猫なんて。

客2 きつと外人なんでしょう。

客1 外人？

客2 ええ。

客1 何が？

客2 だから、猫。

客1 猫に、外人て……。

詩人 エレナ……。

客1・2 ええ？

客2 えれな？

詩人 あ、いや……猫……。

客2 ああ。

客1 ご存じなんですか？ その猫。

詩人 いや、今、急に、閃きました。そう、名づけてみました。

客1 はあ……。

詩人 ……冷えますね、今夜は。底冷えがする。

詩人、しゃがんで火鉢に手をかざす。

客2 かし、あれですか。詩っていうのは。金になるもんなんですか？

詩人 (火鉢を見つめ) ……。

客2 ねえ、先生。詩って、金に……。

客1、客2を肘でつつく。

客2 え？ ……あ！

客1 ん？

客2 (耳の水が) 取れた。

客2、首を振る。

客1 ……。

★暗転。

【M2】

3・バー（一九二九年）

【M2】 続いている。

暗転中、詩人は火鉢から靴（革靴2）を取り出す。履き替え、スリッパを火鉢にし
まう。

明かりがつくと、詩人、カウンターの前の椅子に座っている。

そこは隣のバーである。

カウンターの途中で、バーのママ（パンプス）が、タロットカードを切っている。

ママ　で、お名前は？

詩人　私？

ママ　そうじゃなくて。先生の初恋のお相手。

詩人　ああ……。エレナです。

ママ　えりな。

詩人　いや、エレナ。

ママ　えみな。

詩人　エ・レ・ナ！

ママ　エレナさん？

詩人 ええ。
ママ 止めちゃっていいかしら？
詩人 え？
ママ レコード。聴いてる？
詩人 ああ、いや。どうぞ。

ママ、蓄音機の針を戻す（仕草）。

【M2】CO。

ママ 外人さん？
詩人 はい？
ママ エレナさんて。
詩人 ああ。いや、洗礼名ですよ。
ママ センレーメー？
詩人 クリスチャンネーム。
ママ ああ。
詩人 あれは晴れた冬の日でした。長い髪を洋風に束ね、鮮やかな青いビロードの外套を着て……。
もともと、妹の女学校の友人でしてね。身体が弱かったんでしよう。何度かうちの病院に診

察を受けに来ていて……。私は、一目見て、恋に落ちました。まるでローマのサロンで、ルー・ザロメに出会ったときの、ニーチェのように……。

ママ ニーチェ？

詩人 ええ。

ママ クリスチャンネーム？

詩人 いやいや。有名な哲学者です。「神は死んだ」と言った……。

ママ 神は、死んだ……。

詩人 ええ。(酒を飲む)

ママ それで？ 実ったの、その恋は？

詩人 (首を横に振る)

ママ そう……。

詩人 私が進学で故郷を留守にしている間に、彼女は嫁いでいきました。隣の医者のところへ。

ママ そうなの……。

詩人 故郷に戻ってから、私は彼女に手紙を書きました。それだけじゃない。彼女に会うために、嫁ぎ先まで訪ねて行ったのです。けれど、それが失敗のもとでした。

ママ 失敗？

詩人 ええ。

ママ どういうこと？

詩人 亭主に知られてしまったんです。それで、ずっと秘密にしてきた二人の交歓も、おしまいに

なりました。

ママ ご主人に見られてしまったのね？ エレナさんと、二人でいるところを。

詩人 そうじゃない。

ママ

詩人

私が門柱の陰に隠れて、エレナが出てくるのを待ってたら、あろうことか、亭主が出てきてしまったんです。それで私を見つけて、至極高圧的な態度で私の名前を聞くもんだから、私は、つい……。

ママ 殴ってしまった？！

詩人 正直に本名を名乗ってしまった。

ママ ……。

詩人

ああ、あのときのことを思い出すと、いまだに胸が苦しい！

詩人、グラスの酒を飲む。

ママ、カードを片付ける。

詩人

ねえ、ママ。

ママ

ん？

詩人

私たちは、来世では結ばれるでしょうか？

ママ

来世？

詩人 生まれ変わったら、私とエレナは……。
 ママ つまり、先生は、ハナからその恋を成就させるつもりなんか、なかったのね。
 詩人 え？
 ママ せいぜい恋に恋していただけなんだわ。
 詩人 そんなことはない！ あれは私にとつて正真正銘、最初で最後の恋だったんだから。
 ママ だったら、なぜ奪い取らなかったの？
 詩人 え？
 ママ なぜ？ 彼女はそれを待っていたのよ！
 詩人 そんなこと……世間が許しませんよ。
 ママ ほらね。先生は、エレナさんを利用したんじゃないかって？
 詩人 利用？
 ママ 恋に苦しむ自分の心を、詩に書くことが目的で。
 詩人 利用だなんて……。
 ママ そんなの「恋」とは呼べないわ。(カードを捲り) ほら。カードも言ってる。先生は、ほん
 との恋というものを知らないんですよ。
 ……。

時計屋〈革靴〉が現れる。

ママ あら、いらっしやい。

時計屋 (詩人を認め) ……。

ママ どうぞ。奥に。(テーブルの椅子を勧める)

時計屋 ン。

ママ いつものでいい?

時計屋 ああ。

ママ (酒をつくりながら) 先生は?

詩人 え?

ママ おかわりは?

詩人 あ、はい。じゃあ。

ママ、詩人のグラスに酒を注ぎ、ぞんざいに置く。

そしてべつのグラスの酒を時計屋に運ぶ。

ママ 最近、お忙しいの?

時計屋 ン?

ママ ちつとも顔見せてくれないじゃない。

時計屋 そうかい?

ママ そうよ。もう、ちょうど一月ぶりよ。前に来たのも新月の晩。憑き村の祭礼じゃあるまいし。

ねえ、先生。

詩人 え……ツキムラ？

ママ そういうおかしな村があるのよ。「犬神」に憑かれた住人は肉ばかり食べて、「猫神」に憑かれたのは魚ばかり食べて暮らしているの。

詩人 え？

ママ で、年に一度、月のない闇夜を選んで祭礼をするのよ。その祭の様子は、村人以外の普通の人には全く見えなくて、まれに見て来た人があっても、なぜか口をつぐんで決して話そうとしない。ほら。今日は新月じゃない。

詩人 ……迷信でしょう？

ママ あ！（窓の外を指さす）

詩人 （振り返り、窓の外に目をやる）……。

時計屋 よしなさいよ。都会の人をからかうもんじゃない。

ママ でも、ほんとの話よ。子供の頃、友達の友達のお姉さんの友達が、見たって。

時計屋 とにかく、よしてくれ。酒がまずくなる。

ママ そう。ごめんなさい。

時計屋、酒をあおる。

時計屋 あー。（酒の強さに喉が焼ける）

詩人 ……。(時計に目をやり) あ。そろそろ、お暇いとましないと……。
ママ もう？
詩人 ええ。
ママ こんな時間から、お仕事？
詩人 そうじゃないけど……。
ママ だったら、まだ、ゆっくりしてっいたらいいじゃない。
詩人 そろそろ汽車の時間が……。
ママ ああ。残念。
詩人 おいくらですか？

ママ、詩人に伝票を渡す。

詩人 (財布を開き) あ……。
ママ え？
詩人 ツケにしといてもらうってわけには……。
ママ ええっ!？
詩人 近いうちに必ず払いにきますから。
ママ (訝しむ目で) ……。
詩人 ……あ、じゃあ、これ。(と、懐中時計を) 預けて帰りますから。

ママ 時計？
詩人 すごく高価なものです。舶来品。
ママ ……しようがないわね。
詩人 すいません。近いうち、必ず、払いに来ますから。
ママ お待ちします。

詩人、去る。

ママ (見送りに出て) ありがとうございます。

ママ、戻る。

時計屋 詩人だね？
ママ あら。先生のこと、ご存じ？
時計屋 週刊誌に離婚の記事が……。
ママ ああ。
時計屋 どうしてここに？
ママ 隣の宿に、湯治に来てるんですって。
時計屋 へえ……。 (酒を飲む)

ママ
あ。

カウンターのの上に手帳が置き忘れてある。

ママ (それを手に取り) 先生、忘れてった。……ま、これも質草に預かっておくか。

★暗転。

【M2】

4・家（一九二七年）

【M2】 続いている。

明かりがつくと、そこは詩人の家である。
詩人の妻（裸足）、コンパクトを開き、鼻歌を歌いながら化粧している。
やがて妻の背後に、詩人（裸足）、現れる。

詩人
……。

詩人、レコードを止める（仕草）。

【M2】 CO。

妻、鼻歌を止める。

妻 ……あら。いらしたんですか。

詩人 何してる？

妻 え？

詩人 まさか、出かけるつもりじゃないだろうね。

妻 前から言ってあったじゃないですか。

詩人 よさないか、今夜は。

妻 どうしてです？

詩人 どうして？ 娘が病気なんだぞ！

妻 病気だなんて、大袈裟な……。

詩人 何が大袈裟なもんか！

妻 心配しすぎよ。

詩人 現にひどい熱で、うなされてるじゃないか！

妻 おおかた風邪でもひいたんでしょ。熱なんか寝てればそのうち下がりますよ。

詩人 ……。

（腕時計に目をやり）やだ、もうこんな時間。晩ご飯、茶箆筒にアジの干物が入ってますから。

妻、立ち上がる。

詩人 ちょっと待ちなさい！

妻 まだ何か？

詩人 そこ、座りなさい。

妻 だから、ゆっくりもしてられないんですよ。

妻 詩人

いいから座りなさい！
……。

妻、渋々、座る。

妻

手短にお願ひしますね。

詩人

どうしてキミはそうなんだ？

妻

何がですか？

詩人

娘のことが心配じゃないのか？

妻

心配してますよ。

詩人

心配してたら、こんなときにダンスなんて……。

妻

だって、約束なんですから。

詩人

そんな約束なんて、断れば済む話だろう。

妻

今さら迷惑でしょう？ あちらだって準備なさってるんだし。だいたい、もとはといえば、

詩人

あなたが勧めたんじゃ不是吗か。

妻

何が？

詩人

ダンスですよ。何か雑誌にも、お書きになってたでしょう？ 「舞踏会は惰性的な夫婦生活に

刺激を与え、新鮮なものに蘇らせる」とか、なんとか。あたし、ちやあんと覚えてるんですから。

詩人
かがなんですか？

妻

……。

マエバシのお義父さまだっけいつまでお元気でいらっしやるかわからないだし、そうなたら今までみたいに、仕送りしてもらってわけにはいかないのよ？ 大黒柱のあなたがしつかりしてくださいと。

詩人

今、そういう話をしてるんじゃないだろう。

妻

そういう話になるでしょう。あの子も来年は小学校なんですから、いろいろかかりますよ。そんなこと、言われなくなっただって、わかっているよ……。

詩人

わかっているなら、わかっているなりのことをしてください。

妻

キミは私に、流行歌でも書けというのか？

詩人

書いてみたらいいでしょう。書けるものなら……。

やや問。

妻

(腕時計に目をやり)ほんとに、もう、行かないと。(ハンドバッグを手取る)

妻、去る。

【M3】

詩人

……詩を作ること久しくして、益益詩ますますに自信をもち得ない。私の如きものは、みじめなる青猫むまの夢魔むまにすぎない。

詩人、文机の前に座り、うつぶせて眠る。

5・宿の部屋（一九二九年）

【M3】 続いている。

詩人が文机にうつぶせ、鼾をかいて眠っている。
やがて女中（足袋）が、お盆にお茶漬を載せ、現れる。
宿の、詩人の部屋である。

女中 失礼いたしました。

【M3】 FO。

女中 ……あら。先生、そんなところで……。 （お盆を置き）先生、先生！ ちゃんとお布団で寝ないと、風邪ひきますよ？

女中、詩人の腕の下に原稿用紙を認めた。

女中 ？

女中、それをそうっと抜き取り、読む。

女中 ……詩を作ること久しくして、益益詩に自信をもち得ない。私の如きものは、みじめなる青猫の夢魔にすぎない……。

女中、原稿用紙を捲る。
と、一枚の便箋。

女中 (読んで) 謹啓。父上様、母上様には、ご健勝に過ごされ給ふや。さて小生、湯治の為、此処の温泉に逗留し居り、手元不如意につき、幾許かご送金下され度、御頼み申上候……。

詩人 んん……(目を覚まし) あつ！(原稿用紙と便箋を奪い返す) ちよつとお！ 勝手に読まな
いでくれたまえ！

女中 えへ。
詩人 えへ、じゃないよ。

女中 あまり、お呑みにならない方がよろしいんじゃないやありません？
詩人 ん？

女中 お身体に毒ですよ。
詩人 ……で、何だね？

女中 お夜食のお茶漬け、お持ちしました。

詩人 ああ……どうも、ありがとう。

詩人、お茶漬けを食う。

柱に飾られた絵画の額が傾いている。

女中 (それをまっすぐに直し) ねえ、先生。この絵の景色の裏側には、どんな世界が隠されているんでしょう？

詩人 え？

女中 先生は、そんなふうに考えたことありません？ 何か、「秘密の裏側」があるんじゃないかって。

詩人 秘密の裏側？

女中 何もかもが色鮮やかで、海も、空も、ガラスみたいに透明な、そんな世界が……。

詩人 ……。

女中 お客様のお帰りになられた後、一人でお部屋の掃除をしてると、そんなふうに思えてくるんです。

詩人 つまり同じ一つの表象が、視線の方角を換えることで、二つの別々の面を持つてると。

女中 え？

詩人 なるほど。たしかにこれは、メタフィジックの神秘を包んだ問題だ。君が思い描く、「秘密の裏側」の世界は、君の想念の中に確かに存在する。けれど、この現実の世界で、君は決し

女中　てそれに触れることはできない。そういうことだろ？
先生のおっしゃることは、いちいち難しくして……。
よし。(箸を置く) ならば実際に試してみよう。
女中　え？

詩人、柱から額を外す。

詩人　いいかい？

女中　……。

詩人　1、2の……。

3で詩人、手品のように、パツと額を裏返す。

女中　(凝視して) ……。

しかしむろん、何も起こりはしない。

詩人　これが形而下の世界というものだよ。

女中　ケージカ……？

詩人　つまらない現実ってことさ。

女中 ……。

詩人 憑き村も、もはや今の時代には存在しない。

女中 憑き村？！

詩人 かつてそういう不思議な村が、この辺りに存在していたという話だよ。

女中 ……。

詩人 けれど猫族たちも、時の地層の中で、伝説の化石になってしまった。

詩人、額を元に戻す。

女中 ……いいえ、化石になんかなくなっていない。

詩人 え？

女中 あたし、見たことがあるんです。月のない夜、猫に憑かれた人間が、何人も……ううん、何匹も……列になって峠の道を歩いて行くのを……。

詩人 ……まさか。

女中 ほんとです！

詩人 夢でも見たんだろう。

女中 夢なんかじゃありません！

妻 (声) ただいま。

その声に、詩人、振り返る。

詩人
……？

女中、去る。

6・家（一九二七年）

女中が去ると、妻（裸足）、現れる。
そこは再び詩人の家である。

ただいま。

……。

お茶漬け？ アジの干物、召し上がらなかったんですか？

……。

あの子は？

病院。

え？

入院したよ。

入院？ どういうこと？

……。

このまま熱が下がらなければ、取り返しのつかないことになるかもしれない。
取り返しのつかないことって……ちよっと待ってよ。

……。

命に別状はないのでしょうか？

妻 詩人 妻 詩人 詩人 妻 詩人 妻 詩人 妻 詩人 妻 詩人 妻 詩人 妻 詩人

詩人
妻
脳がやられる可能性を否定できないそうさ。
……。

詩人、お茶漬けを持って去る。
妻、ふらふらと、奥の椅子へ行き、座る。

【M4】

7・ダンスホール（一九二七年）

【M4】続いている。

妻の座る椅子の傍らには、あらかじめ妻の靴が置かれてある。

そこはダンスホールである。

へたり込んだ妻の傍らに、若い男（革靴）、現れる。

どうしました？

……。 （男を見上げる）

どこか具合でも……？

あ、いいえ。慣れないステップで、ちよつと足がもつれてしまつて……。 （靴を履く）

そうですか。

ありがとうございます。

あの、もしよかったら、むこうで少し、お話しませんか。

え？

ご迷惑じゃなかったら。

……ええ……。

妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男

男、妻に手を差し出す。

妻
……。
ありがとう。

妻、男の手を取って立ち上がる。

二人、手をつないだまま柱の間を縫って歩く。

（歩きながら）今日は、お一人で？

ええ。

こちらへは、どなたかのご紹介で？

主人の……。

え、ご結婚されてるんですか？！

ええ。

（落胆し）……そうでしたか……。

何か？

あ、いや……。ここでいいですか？（椅子を示す）

はい。

【M4】FO。

妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男

二人、カウンターの椅子に腰掛ける。

(気を取り直し) で、何なさってる方なんですか？
え？

ご主人。お仕事は？

ああ。詩を書いているの。

詩？

ええ。

詩人ですか！ そりやすごい。

ちつともすぐくなんかかないのよ。

だって、本とか出されてるわけでしょう？

出すことは出してるけど……。

なんて方ですか？

言っちゃってご存じないわ。ぜんぜん売れてないんだから。

はあ……。

それよりあなたは？

はい？

何なさってる方なの？

妻 男 妻 男

僕、今日、持ち合わせが……。
……。ごちそうするわよ。
そうですか？ いや、なんか、すみません。僕から誘っておいて……。
気にしないで。

男、妻、去る。

【M4】

時計屋（革靴）、現れる。椅子に座る。

8・バー（一九二九年）

【M4】続いている。

ママ（パンプス）、現れる。

そこはバーである。

ママ、時計屋の前にグラスを置く。

ママ はい。いつもの。

時計屋 ありがとう。

時計屋、一口、呑む。

ママ、時計屋をうっとり見つめている。

時計屋 ……ねえ、ママ。

ママ ん？

時計屋 とめてくれる？

ママ えっ！ 今日？ そんな、急に言われても。部屋、散らかしてるし……。

時計屋 え？ あ、いや……。

ママ だいいち、心の準備というものが……。

時計屋 それ。

ママ え？

時計屋 レコード。止めてくれる？

ママ ……ああ……。

ママ、レコードを止める（仕草）。

【M4】CO。

時計屋 ……。（酒を飲む）

ママ ……。

気まづい間。

と、詩人（革靴）、現れる。

詩人 こんにちは。

ママ （救われた、というふうな）あら、先生。いらっしやい。

詩人 （時計屋を認め）あ、どうも……。

時計屋 どうも。

ママ (詩人に) 今日はお早いのね。

詩人 こないだのツケを。

ママ ああ。ツケね。

詩人、ママに金を払う。

ママ (数えて) 確かに。じゃあ、これ。(と、懐中時計を)

詩人 どうも。

ママ どうぞ。(カウンターの椅子を勧める)

詩人 あ。あと、私、こないだ、手帳、忘れていきませんでした？

ママ 手帳？

詩人 茶色い、革の……。

ママ ああ。

ママ、カウンターのの中から手帳を取り出す。

ママ これでしょ？

詩人 そうです、そうです！

ママ はい。(渡す)
詩人 すいません。あー、よかったあ。
ママ もう忘れちゃダメよ。大事なものを。

と、駅長(革靴)、現れる。

駅長 こんにちは。
ママ いらつしやい。
駅長 あれ？ 先生……。
詩人 あ、駅長さん。どうも。先日は、ごちそうさまでした。
駅長 いえいえ。こちらこそ、遅くまで引き留めてしまって……。
ママ あら、お知り合い？
詩人 ええ、まあ。
駅長 いやあ、しかし参った、参った。
ママ どうしたの？
駅長 ここ来る途中、迷子になっちゃって。
ママ 迷子？
駅長 近道しようと思って、細い路地に入ったら、出口が見つかんなくなっちゃって。それで、そこいらを、ぐるぐると……。
ママ

ママ おかしな人。狐にでも化かされたんじゃない？
駅長 かも知れんね。しかし、今日は大繁盛だね。雪でも降るんじゃない？
ママ 失礼しちゃう。
駅長 冗談だよお。(と、ママの手を握ろうとする)

ママ、それをするりとかわす。

駅長 ……。
ママ 先生、座って。
詩人 あ、はい。
駅長 ちと、便所借りていい？
ママ 勝手にどうぞ。

駅長、去る。

ママ、カウンターで酒をつくる。

詩人、何気なく懐中時計に目を落とすし、

詩人 あ……。
ママ どうかしました？

詩人 いや、これ……。

ママ え？

詩人 時計が、止まってしまってる……。

ママ あら。あたし、べつに、いじってないわよ？

詩人 いや、べつに、そういう意味では……。

時計屋 どれ。ちよつと見せてください。

詩人 え？

ママ (自慢げに) その人、時計屋さんなの。

詩人 ああ、そうだったんですか……。

詩人、時計屋に時計を渡す。

ママ、ウイスキーの入ったグラスを詩人の前に置く。

ママ はい、先生。

詩人 どうも……。

ママ (時計屋のところへ行き) どう？

時計屋 ……。(時計をいじっている)

ママ 直りそう？

時計屋 ……。(時計をいじっている)

ママ ねえ。

時計屋 今、診てるから！

ママ ……。(しゅんとなる)

時計屋 ああ、こりや部品を取り替えないとダメかもしれないな。おそらくゼンマイが錆びてる。

詩人 そうですか。

時計屋 これ、お預かりしといていいですか。明日までに、うちで直しておきますよ。

詩人 ああ、じゃあ……。

時計屋 ママ。なんか書くもん、ない？

ママ え？

時計屋 先生に、うちの地図、書いてあげないと。

ママ ああ、はい。書くもん、書くもん……。

ママ、去る。

時計屋 ……『時計』という詩が、ありましたよね？

詩人 え？

時計屋 先生の作品に。

詩人 ああ……。よくご存じで。

時計屋 「古いさびしい空家の中で

椅子が茫然として居るではないか。
その上に腰をかけて

編物をしてゐる娘もなく

煖爐だんろに坐る黒猫の姿も見えない」
えっと……。

詩人

「白いがらんだうの家の中で
私は物悲しい夢を見ながら

古風な柱時計の」

詩人・時計屋 「ほどけて行く」

時計屋 「錆びたぜんまいの響を聴きいた。」

詩人 ……。

時計屋 「じぼ・あん・じゃん！ じぼ・あん・じゃん！」

二人、微笑み合う。

時計屋 詩人の耳には、そのように聞こえるのですか？

詩人 え？

時計屋 時計の音が、「じぼ・あん・じゃん！」と……。

詩人 いや、まさか。誰の耳にも同じ時計の音ですよ。

時計屋 では、なぜ……。

詩人 見たり聞いたりを、そっくりそのまま書くなんで、誰にもできません。「書く」ということは、世界を写し取るのではなく、むしろ書かれたものが世界なんです。

時計屋 なるほど。……詩人は嘘をつきすぎる。

詩人 え？

時計屋 (微笑)

ママ、戻って来る。

ママ はい、これ。(と、時計屋にペンとメモ用紙)

時計屋 ああ、ありがと。

時計屋、地図を書く。

ママ、それを背後からじっと覗いている。

時計屋 ……。え？

ママ ん？

時計屋 何？

ママ
ううん……。

そこへ駅長、戻って来る。

駅長 ちよつと、ちよつと、ママ。ほんとに、降ってきた！

ママ え？

駅長 雪。

ママ ええっ？！

駅長 どおりで底冷えるはずだよ。

時計屋 (詩人に) じゃ、これ。(と、地図を)

詩人 あ、どうも。(受け取る)

時計屋 私は店に戻って、さっそく仕事に取りかかるとします。

詩人 はい。

ママ あら、もう、お帰り？

時計屋 ン。(詩人に) では、明日、お待ちしていますから。

詩人 はい。

時計屋 ママ。お会計……。

ママ はい。

時計屋 ツケといってもらえる？

ママ ……。はいはい。
時計屋 (詩人に) くれぐれも、迷子になりませんよう。
詩人 え？ ああ、はい……。

時計屋、去る。

詩人 迷子、か……。
ママ 何？
詩人 あ、いや。……私もちよっと、お手洗いを……。
ママ どうぞ。そこ、突き当たり。
詩人 どうも。

詩人、去る。

駅長 よく、来るの？
ママ 何？
駅長 今の……。
ママ 先生？
駅長 じゃなくて。

ママ ああ、あの人。……どうして？
駅長 だって、なんか、ずいぶん親しそうだから……。
ママ やだ。妬いてんの？
駅長 べつに、そういうわけじゃないけど……。

と、テーブルの上に、詩人の手帳が置かれてあるのを見つけた。

駅長 (それを手に取り、パラパラとページをめくり) しかし、まあ、詩人つうのは、わけのわからんことを……。

ママ ちよつと、よしなさいよ。他人ひとの手帳を勝手に……。 (手帳を取り上げる)

と、写真が一枚、床に落ちた。

駅長 ? (それを拾い) ……誰だろう? 奥さん? ……にしちやあ、ずいぶん若いし、娘さん? にはしては、いくらなんでも大きすぎるし……。

ママ ……エレナ……。

駅長 え?

ママ ……。

駅長 エレナ?

ママ ……ううん。誰かしらね？

【M5】

★暗転。

9・家（一九二七年）

【M5】 続いている。

明かりがつくと詩人の家。

妻（裸足）、椅子に座り、絵のモデルをしている。

若い男（裸足）、スケッチブックを開き、鉛筆で妻の姿をデッサンしている。

……。 （深く溜息をつく）

どうしたの？ 溜息なんかついて。

……。 （なんでもない、というふうには首を横に振る）

退屈？

そうじゃない。

僕のこと、嫌いになった？

そうじゃないわ。

じゃあ……。

このまま死んでしまいたい。

えっ？！

男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻

妻、レコードを止める（仕草）。

【M5】CO。

ねえ。（男ににじりよる）

な……何？

殺して。

ば……馬鹿なこと、言うなよ！

じゃあ、連れて逃げて。

逃げる？

うん。

どこへ？

どこか、誰もあたしたちのことを知らない町。

……無茶だよ……。

どうして？

だって……僕はまだ、学生なんだぜ？

かまわないわ。

キミがかまわなくても僕がかまうのッ！

……。

妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻

男 だいいち、先生はどうすんのさ？
妻 いいのよ、あの人は。
男 娘さんは？
妻 ……。

男 何か、頭の病気で、入院してるんだらう？
妻 あたしのせいじゃないわ！
男 ……。

妻 ねえ。

男 ……

妻 やっぱり殺して。

男 ……

妻 そしてあなたも死んで！

男 ぼ、僕も死ぬの？！

妻、男の首に手をかける。

男 ちよ、ちよ、ちよつと待ってよ……！！

二人、もつれ合う。

間。
詩人、妻を見つめている。
妻、視線を知らし、口をつぐむ。
やがて若い男、沈黙を破る。

男
……あの……僕、今日はこれで……。 (スケッチブックを抱え) 失礼します。

男、逃げるように去る。

妻 詩人 ……。
妻 詩人 どういう了見なんだ？
妻 詩人 え？
妻 詩人 亭主の留守中に、あんな男、連れ込んで。
妻 詩人 人聞きの悪いことをおっしやらないで。
妻 詩人 事実、そうだろう。
妻 詩人 ……。
妻 詩人 娘が入院してるっていうのに……キミは母親としても、妻としても、まるで自覚がなさすぎる！
妻 詩人 だったら最初から、あたしなんかじゃなく、あの方をお嫁にもらえばよかったじゃないです

か。

詩人

あの方？

妻

とぼけて。あたしが何も知らないとも思ってるんですか？

詩人

何のことだ？

妻

あなたが後生大事に写真を持つてる、あの方ですよ！

詩人

……。とにかく二度とこんなマネはよしてくれ。こんなことが親父にでも知れたら……。

妻

知れたら、何だつていうんです？ あなたはいつもそうやって、ご自分のメンツばかり。私を嫁にしたのだって結局そういうことなんですよ。お医者様になれず、家業を継げなかった

詩人

引け目から、お義父さまの顔色をうかがって、気の進まない結婚をしたんだわ。

妻

いい加減にしないか！

詩人

今からでも、そうしたらいいでしょう？

妻

何？

詩人

あの方をお嫁にしたら？ ずっと忘れられないのでしょうか？ 今でも、ずっと……。

妻

キミには関係ない！

詩人

関係ない？ 私は、あなたの妻ですよ！

妻

死んだよ。

詩人

え？

妻

嫁ぎ先で、エレナは……。

詩人

……。

詩人
何が神だ！

妻、
去る。

【S
E
1
】

10・宿の広間（一九二九年）

客1（スリッパ）、週刊誌を手に現れる。
そこは湯治場の宿である。

客1、茫然と佇む詩人に声を掛ける。

客1 あ、先生。おはようございます。

詩人 あ……どうも……。

客1 どうかしました？

詩人 はい？

客1 なんか、ぼーつとして。

詩人 ああ……ゆうべから、ちよつと風邪気味で……。

客1 ああ。あまり遅くまで飲み歩かない方がいいですよ。

詩人 ええ……。女中さん、知りませんか？

客1 女中さんなら、今、裏で雪かきしてますよ。

詩人 ああ。（そちらに目をやる）

客1 何か？

詩人 これ（部屋の鍵を）、女中さんに渡していただだけませんか？

客1 （受け取りながら）お出かけですか？

詩人 ええ。ちよつと、U町^{まち}まで。

客1 U町？

詩人 ちよつと、時計屋まで。

客1 けど、雪で、汽車、動いてないですよ。

詩人 歩きますから。

客1 大丈夫ですか？

詩人 地図、持ってますから。

客1 いや。風邪。

詩人 ああ。ええ。大丈夫ですよ。

客1 お気をつけて。道、滑りやすくなってますからね。

詩人 はい。

詩人、去る。

客1、椅子に座る。

客1

いしよつと……。 (週刊誌を読む) なになに。「帝国ホテルのシヤンデリア輝く下、イノウエ蔵相、ワタナベ法相、タワラ商相 (囃む) ……タワラ商……んん？ ショーショー……ソールシヨール……寒くて口、まわんねーや……。(咳払い) 各国大使・代表。その夫人令嬢などは

振り袖、支那服などもまじえた夜会服姿。午後九時に始まり、夜のふけるのも知らず、午前二時まで踊り狂っていた」……か。フン。いい気なもんだ。

女中（草履）、現れる。

女中 おはようございます。

客1 おはよう。降ったねえ。

女中 降りましたねえ。

客1 降るもんなんだねえ。

女中 滅多にないことなんですけどねえ。

客1 あ！ そうだ、女中さん。ちよつと、これ。

女中 はい？

客1 ここ、読んでみて。

女中 え？

客1 これ。ここ、ここ。

客1、期待に胸膨らませ、雑誌を渡す。

女中 イノウエ蔵相ぞうしやう、ワタナベ法相ほうしやう、タワラ商相しょうしやう。（と、あつさり読む）

客1 ああ……。 (がっかり)

女中 これが、何か？

客1 あ、いや……。 (雑誌を受け取る)

女中 あ、腰の具合、どうですか？

客1 ああ。ずいぶんよくなった。

女中 そうですか。じゃ、ちよっと手伝ってもらえますか？ (と、悪びれることなく)

客1 え？

女中 これ。 (と、平台上のテーブルなどを) 床に雑巾がけしたいんで。

客1 ああ。

女中、客1、平台上の置き道具 (テーブル、椅子、文机) を手前の平台下に運ぶ。

女中 もっと、しっかり、腰入れて！

客1 あ、うん……。 いしょっと。

すべての置き道具を運び終える。

客1 ふう……。

女中 ご苦労様でした。

客1 あ、そうだ、女中さん、これ。

女中 はい？

客1 先生から預かってたんだ。(と、部屋の鍵を)

女中 (受け取り) 先生、お出かけになったんですか？

客1 うん。時計屋、行くとか言ってた。

女中 時計屋？

客1 U町の。

女中 U町？

客1 うん。

女中 U町に、時計屋なんてあったかしら……？

客2 (スリッパ)、現れる。

客2 ああつ、ああつ……。

客1 今度は何？

客2 骨が……。

客1 え？

客2 朝飯の、アジの小骨が、喉に刺さって取れないんですよ。ああつ、ああつ……。

客1 ああ……。

女中 ご飯、丸呑みするといいつて言いますよ。(客1に) ねえ?
客1 ああ。
女中 ちよつと待っててください。今、持ってきますから。

女中、去る。

客1 大丈夫ですか?

客2 ええ……もう、長いんですか?

客1 え?

客2 ここ、いらして。

客1 ああ。ここ来た頃は、まだ、蟬が鳴いてたから……夏の終わりか。

客2 夏の終わり! そりゃ長い。又シですな、又シ。ああつ、ああつ……。

客1 ……。

客2 そういや、新しい客が来たみたいですね。

客1 え?

客2 新しい客が来たみたいですね。

客1 客?

客2 ええ。

客1 もっと、はっきりしやべりなさいよ。(観客席の) お客さん、聞き取れないじゃない。(客席

に) ねえ?

客2 (やや、はつきり) 新しい客が来たみたいですね。ゆうべ、遅い時間に。

客1 ああ。あの夫婦ね。

客2 夫婦なんですか? あの二人。

客1 そう言ってたよ。新婚旅行だって。

客2 そうですか。いいですなあ。若いもんは。ああつ、ああつ……。

客1 銀行家の息子なんだってさ。

客2 銀行家?

客1 実家がね。本人は親のスネ嚙って、画廊のまねごとしてるらしいよ。

客2 いいご身分ですなあ。

客1 まったく。

客2 でも、あれですな。金持ちがケチってというのは、本当なんですなあ。

客1 え?

客2 だって、新婚旅行で、わざわざこんな安宿に……。

客1 いや、途中で雪に降られて、汽車が止まっちゃったんだって。本当は老舗の、リツパな高級

旅館を予約してあるらしいよ。

客2 ああ、なんだ、そういうこと。

女中、戻って来る。

女中 これ。(と、握り飯を)
客2 あ、ありがとう。(受け取る)
女中 嚙んじゃダメですよ。丸呑みですよ、丸呑み。
客2 ん……。

客2、握り飯を丸呑みする。

客2 ……。(むせる)
女中 だ、大丈夫ですか？(背中をさする)

スーツ姿の若い男(スリッパ)、現れる。

女中 あ、おかえりなさいませ。
男 ただいま。
女中 どうでした、汽車は？ もう、動いてました？
男 いえ、まだ……。
女中 そうですか。

客2、なんとか落ち着く。

客1 (男に) まあ、ゆっくりしてたらいいじゃない。慣れれば、ここも悪くはないよ。
男 はあ。

女中 (男に) 奥様は？

男 庭で雪だるま、つくってます。

女中 ああ。

男 まるつきり子供で困ってしまいますよ。

客1 いいじゃないですか、かわいらしくて。

男 かわいいだけじゃ……。

客1 羨ましい限りですよ、あんな若い奥さん。

女中 ちよっと田中絹代に似てらっしゃいますよね。

客1 おお、似てる、似てる。

男 僕はこれから、あれを、いっばしの近代婦人に育てあげるつもりです。

一同 キンダイフジン？

男 ええ。そのために、まずは、文化や芸術を教えてやらねばと思ってます。音楽や絵画、ダン

客1 ス、それから、詩などを……。

男 詩？

客2 はい。

男 なら、ちようどいい。この宿に一人、エライ詩人の先生が泊まっていますよ。

(聞き取りにくく) はい？

客1 詩人が、泊まってるんですよ。

男 詩人が？

客2 (女中に) ねえ。

女中 有名な詩人の先生なんです。

男 それはぜひ、お会いして、お話を伺いたいな！ いや、実は僕も学生時代の知り合いに、一人、有名な詩人がいるんですよ。

【SE2】「汽笛」。

男、客1、客2、女中、窓外(客席側)に目をやる。

女中 汽車、動き出したのかしら？

客2 あ！

男 ？

客2 (骨が) 取れた。

【M1】「nash1」

★暗転。

11・猫町（一九二九年）

【M1】 続いている。

明かりがつくと、そこは時計屋に向かう峠道である。

黄昏時。

詩人（革靴）、現れる。木々（柱）の間を縫うように歩きながら――。

詩人

いったいどれだけの時間、歩いたのだろう。すでに陽は、山の向こうに沈んでしまった。道標として唯一たよりにしていた汽車のレールも、もはやどこにも見えなくなった。私はだんだん不安になってきた。引き返そうと、後ろを振り返るが、そこにも前と同じく、ただ、暗闇が続くばかりだった。……私は、道をなくしたのだ。

と、舞台奥壁の裏から、妻と娘の声が聞こえてくる。

妻の声 今日からおまえは、お父様と一緒に、マエバシのお祖父様の家に行くのよ。

娘の声 お母様は？

妻の声 ……。

娘の声 お母様は一緒に行かないの？

妻の声 あとで行くから。
娘の声 あとで？
妻の声 うん。
娘の声 あとでって、いつ？
妻の声 お母様の、髪が、伸びたらね。
詩人 ……。

妻、風呂敷と鞆を手に、現れる。

【M1】FO。

詩人 キミ……。
妻 これを。(と、風呂敷包みを)
詩人 ?
妻 あの子に、着せてやってください。
詩人 何だい？
妻 外套です。青い、ビロードの。じきに、冬がきますから。
詩人 ……。(受け取る)
妻 じゃあ。

詩人

行くのか。

妻

ええ。

詩人

……そうか。

妻

止めないんですね。

詩人

……。

妻

後悔してます？

詩人

後悔？

妻

あたしと一緒にになったこと……後悔してます？

詩人

……すべて、私の過失だ。

妻

……。過失、ですか。

詩人

……。

妻

お元気で。あまり飲み過ぎないでくださいね。

妻、去る。

【SE2】

【SE3】

詩人

「夜汽車の仄ほのぐら暗しやどろき車燈の影に

母なき子供等は眠り泣き

ひそかに皆わが憂愁ゆうしゆうを探れるなり。

嗚呼あゝまた都みやこを逃れ来て

何所いづこの家郷かきように行かむとするぞ。」

この間、四方の白壁に、窓枠の影が大きく、いくつも交錯して伸びる。

詩人 汽車が私を運んだ先は、しかし私の知らない、どこかの町だった。

【M6】FI。

奥の白壁に、町の影。

詩人 故郷とは似ても似つかない。まるで現実の町ではなくって、幻燈げんとうの幕に映った影絵のように思われた。

詩人、奥に向かって歩き出す。

詩人

……この町のどこに、私たちの幸福があるのだろうか。どこに、私たちの恋人があるのだろうか。青ざめた恐怖の中で、とりかえしのつかない悔恨かいこんばかりが、野鼠のねずみのように走っていった！

【M6】 高まる。

と、奥の白壁がゆっくりと手前に倒れる。

壁が風を起こし、床の枯葉が舞う。

壁の向こうに現れた、猫、猫、猫……。

詩人

……。 (思わず後ずさる)

詩人の傍らを、手に灯りを持った猫たちが、失った「道」を探すように、ゆっくり無言で通り過ぎて行く――。

12・時計屋（一九二九年）

猫が去ると、時計屋（革靴）、現れる。

【M6】CO。

明かりが変わる。

そこは時計屋の店内である。

時計屋 お待ちしておりました。

詩人 え？

時計屋 ゆきみち雪道で難儀なさったでしょう。

詩人 ああ……。

時計屋 あまり遅いものだから、どこかで迷子になっているんじゃないかと、心配していたんですよ。

詩人 ……。

時計屋 どうかなさいました？

詩人 いや、今、猫が……。

時計屋 猫？

詩人 ええ。そこの路地で……。

時計屋 猫など、べつに珍しくもない。

詩人 それが、普通の猫ではなくて、人の恰好をした……。

時計屋 そんなバカな。

詩人 本当です！

時計屋 夢でも見たのでしよう。

詩人 夢？

時計屋 ええ。

詩人 そんなはずはない。確かに、私はこの目で見たんだ！

時計屋 ……。そうですか。しかし、どっちにしても同じことですよ。

詩人 同じこと？

時計屋、カウンターのなかから一冊の本を取り出す。

表紙に『猫町』と書かれてある。

時計屋 「支那の哲人荘子は、かつて夢に胡蝶となり、醒めて自ら怪しみ言った。夢の胡蝶が自分で

あるか、今の自分が自分であるかと。この一つの古い謎は、千古にわたってだれも解けない。

錯覚された宇宙は、狐に化かされた人が見るのか。理智の常識する目が見るのか。そもそも

形而上の实在世界は、景色の裏側にあるのか表にあるのか。おそらくだれも、この謎に解答できない。」

詩人 ……。

時計屋 ほら。先生自身がお書きになつてる。

詩人 私が？

時計屋 ひよつとすると、この私も、先生が夢に見ているにすぎないのかも知れない。あるいは、先生が、私の夢の登場人物なのか……。

詩人 ……。

時計屋 (本を置き) 一杯、やりませんか。とっておきのワインがあるんです。

時計屋、カウンターからワインとグラス二つを取り出し、それぞれに注ぐ。

時計屋 どうぞ。

詩人 ……憑き村、ではありませんか？

時計屋 え？

詩人 私が見た、あの猫は、憑き村の住人では……。ほら、こないだ、ママが話していたでしょう？

時計屋 こないだ？

詩人 こないだ、バーで……。

時計屋 何の話ですか？

詩人 え？

時計屋 そうだ。時計でしたね。修理、できてますよ。

時計屋、去る。

詩人

……。

詩人、『猫町』の本を手に取り、読む。

詩人

「私の物語は此所で終る。だがしかし、今もなお私の記憶に残っているものは、あの不可思議な人外の町。窓にも、軒にも、往来にも、猫の姿がありありと映像していた、あの奇怪な猫町の光景である。……人は私の物語を冷笑して、詩人の病的な錯覚であり、愚にもつかない妄想の幻影だと言う。だが私は、たしかに猫ばかりの住んでる町、猫が人間の姿をして、街路に群集している町を見たのである。理窟や議論はどうにもあれ、宇宙の或る何所かで、私がそれを「見た」ということほど、私にとって絶対不惑の事実はない。あらゆる多くの人々の、あらゆる嘲笑の前に立って、私は今もなお固く心に信じている。あの裏日本の伝説が口碑している特殊な部落。猫の精霊ばかりの住んでる町が、確かに宇宙の或る何所かに、必ず実在しているにちがいないということ。」

詩人、本の奥付を見る。

詩人

昭和十年十一月……。六年後の私が、こんな物語を書いたのか……。

【S E 1】

詩人、本をカウンターの上に置く。
そしてグラスのワインを一息に飲み干す。
グラスを置き、風呂敷包みを手に、商店街のある表通りへ出て行く――。

13・駅（一九二九年／一九二七年）

男（革靴）、現れる。

溜息をつき、椅子に座る。

駅長（革靴）、箒とちりとりを手に現れる。

そこは駅の待合室である。

駅長 おはようございます。

男 ああ、おはようございます。

駅長 あれ？ 奥様は？

男 そのの、土産物屋で、足止め食ってて……。

駅長 ああ。

男 （溜息）

駅長 どうかしました？

男 え？

駅長 溜息なんかついて。

男 ああ。いや……。

ママ（パンプス）、現れる。

ママ おはようございます。
駅長 あれ？ ママ。どしたの？
ママ 宿まで、先生、送り届けてきたの。
駅長 先生を？
ママ 呑み慣れないワインなんか呑んで、酔いつぶれて。もう、たいへんだっただから。
駅長 ああ、そうなの……。俺も酔いつぶれてみよつかなあ。
ママ え？
駅長 そしたらママ、介抱してくれる？
ママ はあ？

客1 〈革靴〉、風呂敷包みを提げて、表通りから現れる。

客1 おはようございます。
駅長 あ、おはようございます。
客1 (ママに) あ、先ほどは……。
ママ どうも。
駅長 (客1に) お帰りですか？
客1 ええ。

駅長 いかがでした？ この温泉は。

客1 素晴らしいお湯でしたよ。おかげで、ほら、腰痛もすっかり。

駅長 それはよかった！

客1 (男に) あ、おはようございます。

男 (元気なく) おはようございます……。

客1 残念でしたね。

男 はい？

客1 先生、あんな状態で、まともに話、できなくて。

男 ああ……。

ママ あら。先生にご用事が？ ごめんなさいね。だったら無理にでもゆうべの内に帰すんだった。

男 いいえ。むしろ、帰してくれなくて助かりました。

ママ え？

男 あ……ちよつと、女房の様子、見てきます。

男、去る。

ママ ……？

客2 (革靴)、現れる。青猫のお面を手を持っている。

客2 おはようございます。

客1 あ、おは(よう)。……何? それ。

客2 ああ。猫じゃないですか? (お面を顔にあてがい) ニャー!
……。

客2 その土産物屋で買ったんですよ。孫のお土産に。

客1 ああ。

客2 他には、漬け物とか佃煮とかばっかで、子供の喜びそうなもんが何もなくて……。
女中の声 お客さま~!

一同 ?

女中〈草履〉が、表通りから駆け込んでくる。

女中 お客さま、これ。

客2 え?

女中 忘れ物。(と、風呂敷包みを)

客2 あ、いけね。(受け取る) また女房に叱られるとこだった。

女中 (ママを認め) あ、先ほどは、どうも。

ママ どうも。

駅長

(腕時計に目をやり) あ、そろそろ……。 (咳払い) えー、みなさん。これより上りの改札を始めます！こちらに1列にお並びください。1列でお願いします！

客2、客1、わざわざと1列に並ぶ。

駅長

お忘れ物、ないですか？

客2

ええ。(と、切符を)

駅長

はい。(切る)

女中

お気をつけて。

客2、客席側に去る。

駅長、客1の切符を切る。

女中

またのお越しを。

客1、客席側に去る。

女中

さて。あたしは宿に戻って、ケージカのお掃除しなきゃ。

駅長

ケージカ？

女中

つまらない現実ってことですよ。

女中、表通りに去る。

駅長 ケージカ……。あれ？ ママ、早くしないと、汽車、来るよ。

ママ ちよつと、U町まで行まちこうと思つて。

駅長 U町？

ママ うん。

駅長 U町に、何か？

ママ 時計屋さんへ。お店の時計、買い換えようと思つて。

駅長 ああ……。

ママ 下りの汽車は？

駅長 まだ、一時間先。

ママ じゃあ、歩いた方が早いわね。

ママ、表通りに去る。

駅長 (その後ろ姿を見送り、独りごちる) ……U町に時計屋なんて、あつたかなあ……？

と、時計屋(革靴)、ホーム(客席側)から現れる。

駅長 あ……。
時計屋 おはようございます。
駅長 おはようございます……。

時計屋、椅子に座る。

駅長 あの……。

時計屋？

駅長 つかぬ事をうかがいますが、あなた、ママとは……。

【SE2】

駅長 ……。あの若い夫婦も、上りに乗るんじゃないかな？（時計屋に）失礼。……お客さん。汽車が出ますよお！

駅長、表通りに去る。

【SE4】

明かりが夏のそれに変わる。
時計屋、コートを脱ぐ。
と、夏服の妻へ。パンプス、表通りから現れる。

妻 こつちこつち。何してるの？ 早くおいでなさいよ。

若い男（革靴）、両手に大きな鞆を持って現れる。

男 ねえ。

妻 ん？

男 やっぱり、よさない？

妻 ……え？

男 ……。

妻 よすって、何を？

男 いや、だから、駆け落ち……。

【SE4】FO。

妻 何よ？ 今さら。

妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男 妻 男

だって、こんなこと、世間が許さないよ。
世間？

うん。

どうしてよ？

どうしてって……。

晴れて独りになったのよ。なぜ人目を憚る必要があるの？

そりゃ、理屈はそうかも知れないけど……下手すりゃ、これ、新聞沙汰だぜ。少なくとも確
実に週刊誌のネタにはなる。

ネタにしたけりゃさせとくわ。

僕は、君のように、強くはないよ。

強い？ あたしが？

……。

要するに心変わりしたわけね。

そうじゃないけれど……。

だったら……。

描きかけの絵もあるしさ。大学の卒業制作なんだよ。僕の将来がかかってんの。だから……。

……。わかったわ。

……。ごめんよ。

謝らないで！

男 ……。
妻 何してるの？ さつさと行きなさいよ！

男、妻の荷物を置いて去る。

妻 ……。 退屈な人。

妻、椅子に腰掛ける。歌を口ずさむ。

妻 「宵闇せまれば 悩みは涯はてなし

みだるる心に うつるは誰たが影……」

時計屋、妻の傍らに歩み寄り、懐中時計を差し出す。

時計屋 これを……。

妻 え？

時計屋 これを、お渡ししておきます。

妻 何ですか？

時計屋 先生の時計です。

妻 あの人の……？

時計屋 ええ。

妻 ……どちらさま？

時計屋 時計屋です。修理を頼まれていたんです。ほんとは昨日、先生が店まで取りに来るはずだったんですが……。

妻 昨日？

時計屋 ええ。昨日。

妻 そうですか……。でも、あたしは、もう、あの人の妻ではないわ。二度と会うこともない。

時計屋 わかりませんよ。

妻 え？

時計屋 時計の長針と短針とが重なるときがあるように、この世界で起こるべきことは、ある周期によつて、そっくりそのまま繰り返されることがある。いつか、何百万年かの間に。

妻 ……。

時計屋 未来は過去であり、過去は未来であり、つまりすべては同じことの繰り返し。ただ、この瞬間だけが、「今」に対する原因であり、結果なのです。

妻 ……。

時計屋 これは、あなたが持っていないさい。

妻、懐中時計を受け取る。

【SE2】

時計屋 時間だ。大いなる正午がやってきた。……では、また、いつか。月のない夜に。

時計屋、去る。

沈黙。

妻 ……。

妻、懐中時計を見つめる。

と、どこからか、かすかに「君恋し」が聞こえてくる。

【M7】

妻、置き去りにされた荷物を手に取り、立ち上がる。

そして一歩踏み出したその瞬間、

【M7】 大音量に。

妻

……。

夏の光が真上から妻を射す。
妻、正面を正視したまま、ストップモーション。
彼女には今、一切の影がない。

曲調の変わり目で明かりが変わる。
登場人物たち、客席の後方から一斉に現れる。

エピソード

出演者らが客席に向かい一礼をして、舞台奥を通り抜け、表通りへ出ていく。
客電がつく。
柱の、傘のついた電灯も。

【MO】

係の案内に従って、観客らもまた舞台を通り、小屋の外へ出て行く。

※

この小屋の表口が、物語の出口である。

〈幕〉

参考文献

- 『猫町 他十七篇』萩原朔太郎作／清岡卓行編（岩波文庫）
『萩原朔太郎詩集』三好達治選（岩波文庫）
『詩人 萩原朔太郎』佐藤房儀著（双文出版）
『若き日の萩原朔太郎』萩原隆著（筑摩書房）
『父・萩原朔太郎』萩原葉子著（中公文庫）
『鳩よ！』第11巻第4号（マガジンハウス）
『生きて行く私』宇野千代著（角川文庫）
『【激写】昭和』毎日新聞東京本社写真部OB会（平河出版社）
『ツアラトウストラはこう言った』ニーチェ著／氷上英廣訳（岩波文庫）